

第3章 中津市の歴史文化の特徴

英彦山の源流から中津干潟の河口まで中津市域を縦断する一級河川「山国川」と、奇岩奇峰が織りなす独特の自然景観は、中津独自の歴史文化を生みました。中津の歴史文化の特色を、山国川とその支流が織りなす上中流域の「山間部」、山国川下流域の「沖積平野と洪積台地」、山国川が周防灘に流れ込む河口に作られた城下町と中津干潟のある「沿岸部」の3つの地域ごとに概観します。



《図15：歴史文化の特色に応じた3地域》

1. 山間部：奇岩奇勝の地形に根差した歴史文化

奇岩と溪流が織りなす神秘的な地形は、命をはぐくみ、祈りの地となり、芸術が生まれ、やがて広大な「名勝耶馬溪」が誕生しました

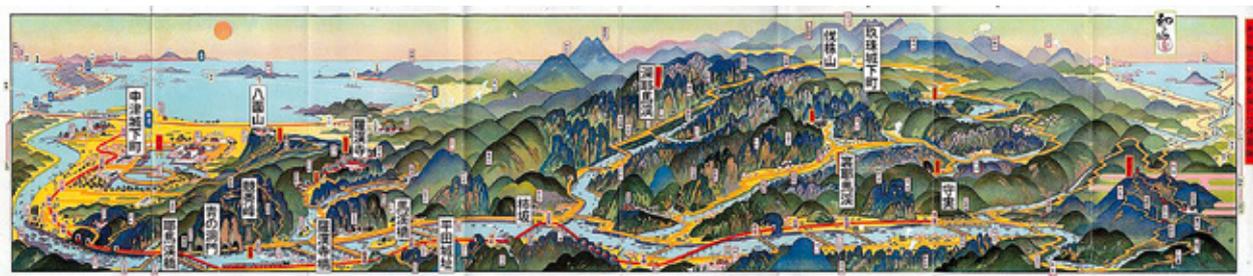
【奇岩奇勝の地形】上中流域は「耶馬溪」と称される地域で、数百万年前からの火山活動により形成された溶岩台地とそれを開析する谷によって構成されます。変朽安山岩が露出する甌穴群や柱状節理の奇峰、風や水が浸食して生まれた岩窟など、神秘的な地形が展開します。森林と溪流は動植物たちにとっての楽園となり、自然豊かな耶馬溪で命が育まれてきました。今から18,000年前、旧石器時代の終わり頃から山国川中流域に住み始めた人々は、自然の浸食でできた洞窟や岩陰、または川近くの見晴らしのよい高台を拠点とし生活しました。

【岩場に神仏を見る】奇怪な岩は古来より信仰の対象となり、岩場にぽかりと開く岩窟は、修行者たちにとっての格好の行場となりました。耶馬溪には、奇岩奇勝に仏を見出した人々による神仏の像や石造物が数多残されています。中国天台山に見立てた岩窟に安置された羅漢寺石仏（国重文）はそれを象徴しています。修験道の霊場の1つであった「ひばるさんしょうへいじ 桧原山正平寺」※では、「まつえ 松会」とよばれるお田植祭りの形を伝える「桧原マツ」（県無民）が伝承されています。



写40：岩窟の寺院 羅漢寺

【溪谷の交通インフラと広大な名勝地】岩石と溪流が織りなす中国の南画を思わせる風景は、多くの文人墨客の心を奪い、数多の芸術が生まれました。平地が少なく、川の近くまで岩場が迫る厳しい環境の中で、人々は岸壁を穿ちトンネルを掘り、石畳を通し、激流に耐える石橋を次々と架けていき、やがて自然美と人工美が共生する観光地「耶馬溪」が生まれました。大正時代、耶馬溪に広範囲に点在する美しい景勝地は国指定名勝となり、景観が守り伝えられています。5つの自治体にまたがる「耶馬溪」（国名勝）66景のうち、49もの景を中津市内で楽しむことができます。



写41：大正15年作成の吉田初三郎「天下無二耶馬全溪の交通図絵」

※国土地理院の地図では山は「檜原山」だが、正平寺は「松原山正平寺」と表記。

2. 沖積平野と洪積台地：肥沃な大地に生きる歴史文化

渡来人の技術で開発された肥沃な大地には、宇佐八幡宮と密接に結びつきながら計画された「古代のまち」が生きています

【渡来人が伝えた技術】 下流域の洪積台地や山国川が運んだ土砂が作った沖積平野「沖代平野」は、古くから開発が進んだ地です。古墳時代の住居からは朝鮮半島に由来するオンドルが確認されています。渡来人による技術として代表的なものが登り窯による須恵器生産です。古墳時代から奈良時代まで須恵器や瓦が焼かれた「野依・伊藤田窯跡群」は、九州でも有数の窯跡です。また、八面山の山裾の台地上では、水をせき止めたため池による灌漑が行われました。宇佐八幡宮に祀られる八幡神は渡来系の神であり、その祖宮とされる「薦神社三角池」（県史跡）の堤防は、渡来系の技術である「敷粗朶工法」※で築かれています。朝鮮半島に近い豊前地方には、渡来人たちの技術がいち早く伝わり、彼らによる治水の技術が現在まで中津の米作りを支えています。



写42：薦神社の三角池

【今も残る古代のまちづくり】 古代、地域の豪族が拠点とした集落には、白鳳寺院の「相原廃寺跡」（県史跡）の礎石や基壇が現存しています。「薦神社三角池」の堤防を通り宇佐八幡宮へと続く古代官道は、県道として現在も使われています。この道を基準に条里水田の方形区割りが行われており、その大部分が中世には宇佐八幡宮の荘園となっていました。肥沃な大地では、今も古代の区割りのままで米作りが行われています。ため池や条里の土水路などの灌漑施設は、人里に生きる動植物の貴重な生息域となっています。条里を望む高台には、税としての米を収納する郡衙正倉跡「長者屋敷官衙遺跡」（国史跡）があり、現在整備が進められています。夏の終わりには、条里水田への水の供給に由来する「鶴市傘鉾神事」（県無民）が執り行われます。朝、「八幡鶴市神社」を出発した花傘鉾の行列は、大井手堰からの灌漑に関わる集落を一日かけて巡行します。中津には、宇佐八幡宮



写43：大井手堰の水掛かりの集落を巡る鶴市傘鉾神事

中津には、宇佐八幡宮

と密接に結びつきながら計画された古代のまちが生きています。

※敷粗朶工法：軟弱な地盤の沈下や崩落を防ぐため、樹木の枝葉を何層も敷き並べながら積み上げる工法。

3. 沿岸部：進取の気質が生んだ歴史文化

黒田官兵衛が山国川河口にお城を築いてから福澤諭吉が先導した近代化まで、中津の文化は「進取の気質」によって育まれました

【九州最古の近世城郭・中津城】 耶馬溪の溪谷から土砂を運んできた山国川は、周防灘で海に出て、瀬戸内海最大級の「中津干潟」を作りました。干潟には、魚や甲殻類、鳥類など多様な生き物が生息しています。この河口域では、近世以降、進取の気質が文化を育んできました。豊臣秀吉から豊前国を与えられた黒田官兵衛が城を築いたのは、山国川河口の平野部でした。「中津城跡」(県史跡)には九州最古の近世城郭の石垣が現存します。城下町を囲んだ総構えの土塁「おかこい山」(市・県史跡)の一部が残るのも九州では中津だけです。江戸時代には、九州初の上水道施設「御水道」^{おすいどう}が作られており、今でもしばしば御水道の施設の一部が地中から検出されます。



写44：中津城跡の黒田時代の石垣

【蘭学・医学の先進地】 中津藩主奥平家は、蘭学に熱心な藩主を生みました。3代目藩主は藩医の前野良沢に蘭学を学ばせ支えたことで、解剖書『解体新書』の翻訳を成功させます。5代目藩主は日本初の和蘭辞書・蘭和辞書を編纂させ、その後の西洋文化・科学の導入に貢献しました。「村上医家史料館」(市史跡)は、藩の許しを得て九州で初めて人体解剖を行った藩医の村上玄水の旧宅で、建物と関係史料を公開しています。同じく中津藩医の旧宅「大江医家史料館」(市有形)も公開しており、医学・蘭学の展示館が2か所あるのも中津の特色を表しています。



写45：村上医家史料館の薬局

【福澤諭吉と中津の近代化】 中津出身の福澤諭吉は、蘭学から英学へ転向し、幕府の遣米・遣欧使節団に同行し、西洋近代文明への見識を深め、江戸にて慶應義塾を開きました。福澤諭吉は、教育や出版を通して中津に西洋思想を導入し、中津の近代化を支援し、中津からは福澤門下生が巣立ち、実業界で活躍しました。先進的な学問の奨励、観光振興、製糸工業や鉄道網の整備など、中津の近代化には福澤諭吉や福澤門下生らの先導が大きな影響を与えています。



写46：福澤諭吉旧居